

全球地球観測システム

Global Earth Observation System of Systems (GEOSS)

東京大学・空間情報科学研究センター

柴崎亮介

2003年エビアン G8 サミットでの小泉元首相の提唱で開始された「全球地球観測システム」(Global Earth Observation System of Systems (GEOSS)) という概念は、その後ワシントンでの地球観測サミット (2003年)、東京 (2004年)、ブリュッセル (2005年) を経て具体化され GEO (Group on Earth Observation:地球観測グループ) が 2005年から活動を開始した。

• 地球観測サミット I

- July 31, 2003, Washington, D.C.
- 34 Countries and 20 International Organizations



• 地球観測サミット II

- April 25, 2004, Tokyo, Japan
- 47 Countries and 26 International Organizations



• 地球観測サミット III

- February 2005, Brussels
- Nearly 60 Countries, EC and over 40 International Organizations



図1 GEOSS実現までの道のり

さまざまな現業機関、研究機関などで実施されている地球観測データの流通や統合的利用を促進し、9つの社会利益分野（健康、災害、気象、エネルギー、水、気候、農業、生態系、生物多様性）への貢献を果たすことが GEOSS のミッションとなっており、地球環境問題やそれに起因するさまざまな地域的課題の解決や軽減に向けて世界の国々からの強いメッセージが込められている。GEO は国や国際機関のボランティアにより運営されており、国連などと違いそこでの決議などは拘束力を持たない。また既に各機関が運用している観測システムや情報システムの統合のようなことは求めない（ちなみに GEOSS がシステム・オブ・システムズになっているのはそうした理念の表れである）。そのため組織が迅速に立

ち上がり（現時点で 76 の国と 51 の非営利国際機関が参加）、柔軟な活動をとることができる反面、たえず参加メンバーを鼓舞しデータやサービスの無償提供を促し、統合的な利用を実現する努力を続けなければならない。具体的には、データなどの流通を促進する情報基盤の開発に加え、さまざまな利用者グループ・科学者グループとの対話、能力開発を推進している。

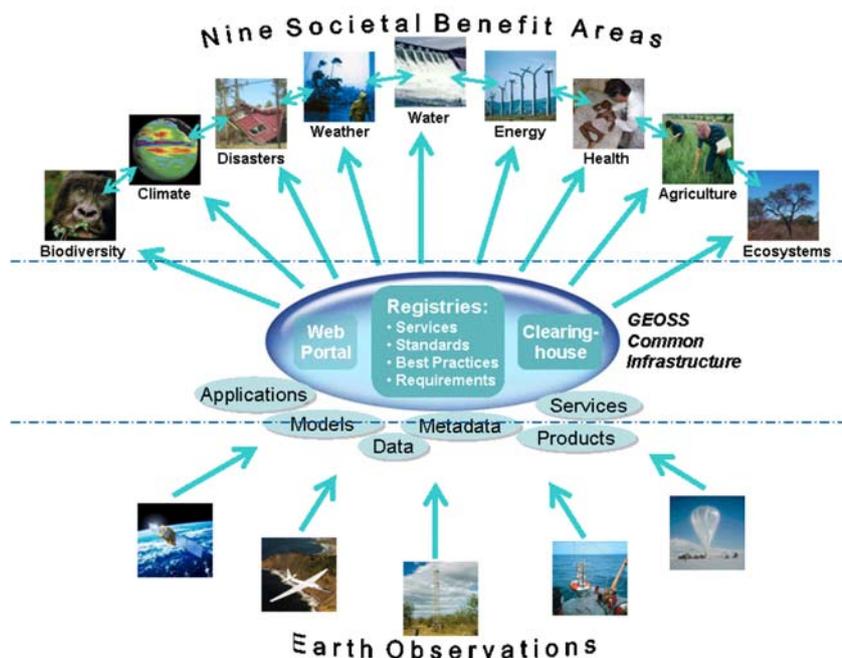


図2 全球地球観測システム GEOS (A Global Earth Observation System of Systems) の概念

筆者はデータなどの流通を促進するための委員会（構造・データ委員会 Architecture and Data Committee (ADC)) の共同議長の一人として、データや情報サービスの「見える化」を中心に活動している。基本的な考え方は、1) GEOS が国際社会の中で高いステータスを持っていることを利用し、2) データや情報サービス、ノウハウ、情報標準などの提供を促進し、3) その結果を GEO のポータルサイトをショーウィンドウにして並べることで、4) 一層の提供と統合的な利用を喚起する、さらに5) さまざまなイベントやコンペなどを通じて自発的な貢献を刺激する、ことからなっている。「見える化」のための情報システムさえ、こうした自発的な貢献により開発・運用されている。講演では「見える化」の観点からどのような努力を行っているのか、また今後データやシステムの相互運用性を一層高めていくためにどのような構想を持っているのかを紹介する。